

マルクス、エンゲルスニオケル「ジョウブコウゾウ」ト「イデオロギー」ニツイテ

徳本, 正彦
九州大学教養部講師

<https://doi.org/10.15017/1410>

出版情報：法政研究. 27 (2/4), pp.381-394, 1961-03-25. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



マルクス、エンゲルスにおける

「上部構造」と「イデオロギー」について

徳 本 正 彦

はしがき

周知のように、ここ数年来、現代政治にたいする史的唯物論の方法論的有効性が問われている。この問題は、本質的には、なにもいまにはじまったことではない。そしてマルクス主義の批判と反批判の歴史は、おおすじにおいてその有効性を実証してきたといえる。だが、史的唯物論は完成されおわったわけではない。「科学的な理論と方法は、不変のままであるわけにゆかず、発展しないわけにはゆかず、新しい情勢から、社会のたえまない発展過程のうちには不可避的に発生する諸条件から出てくる新しい発見、概括、結論によって内容を充実しないわけにはゆかない」^(一)のである。現代政治の複雑な展開とその実証的な究明の必要性は、このことをことのほかつよく提起している。この意味において、史的唯物論を再検討していくなかから、政治学の方法を構築していくことが要求されているといわねばならない。この場合、対象は問題の性格からして、上部構造論とイデオロギー論におかれざるをえない。本稿では、その手はじめとして、マルクス、エンゲルスにおける所説の批判的撰取の方法^(二)についてのべる。

(一) コンスタンチーフ監修、ソヴェト研究者協会訳『史的唯物論』一九五五年、大月書店 第一冊、四九頁。

マルクスとエンゲルスとが、「そのはじめての共同労作のなかで」すでに土台と上部構造の関係についてはっきりした結論に到達していた、というとならば、^(二)実は正しくない。なるほど最初の共同労作、『神聖家族』は、いやさらにその前のマルクス『ヘーゲル国法論批判』やエンゲルス『国民経済学批判大綱』は、経済制度こそが社会生活のなかで規定的な役割をはたすものであり、そのうえにさまざまな思想や諸制度がなりたつものであることを示唆するものであった。だが、この段階においてかれらは、これらの関係を、「土台」と「上部構造」という概念でとらえかえしていたのではなかった。

厳密に言えば、マルクス、エンゲルスにおける上部構造論の登場は、史的唯物論の誕生期（『神聖家族』まで）を準備段階とした確立期（『ドイツ・イデオロギー』から『経済学批判』まで）においてであったといわねばならない。『ドイツ・イデオロギー』（一八四六年）こそはじめて「上部構造」概念を提起し、「イデオロギー」概念を成し立てしめた画期的な著作にはかならなかった。^(三)

マルクスは、同書においてはじめて「上部構造」(Superstruktur) という言葉を用いて次のようにのべている。「ほんとうの市民社会はブルジョアジーの出現とともににはじめて発展する。だが、直接に生産と交通とにもとづいて発展する社会組織——あらゆる時代に国家やその他の観念的上部構造の基礎をかたちづくるもの——は、つねにこれと同一の名でよばれてきた。」と。もとより、この文章は上部構造概念をあきらかにする姿勢で書かれているのではない。ここでは「上部構造」という言葉は、生産と交通に依拠する社会組織一般を指しており、それは厳密な意味ではなしにむしろ比喩的な表現として用いられている。^(四)

だが、『ドイツ・イデオロギー』の積極的な意義は、社会的存在から社会的意識を適確に把握した、という事実のなかにある。マルクスとエンゲルスとがここで試みた作業は、すでに『神聖家族』にはじまっていたドイツ的イデオロギーとの対決を拡大し、これらイデオロギーの内容とその社会的、物質的基礎との関係をあきらかにし、その階級性を暴露することであった。思想の問題が、それら諸思想の生産諸条件についての考察なしに云々されていたなかにあって、それら諸思想を、物質的な生活過程からとらえなおす方法がしめされたとき、それは、とりもなおさずより科学性をもった思想の成立を意味していた。この方法が意味するものこそ、社会的存在を反映した社会的意識としてのイデオロギー概念の成立にはかならなかつたのである。かれはいう。

「各種の観念、表象、意識の生産は、まずはじめに、人間の物質的活動と現実生活のことばである物質的交通とのうちに、直接に織りこまれていく。人間の表象作用、思维作用、精神的交通は、ここではなお、かれらの物質的行動の直接の流出としてあらわれる。ある民族の政治、法律、道徳、宗教、形而上学等々のことばのうちにも、同様な精神的生産についても、同一なことがある。人間はかれらの諸表象、諸観念等々の生産者である。……（中略）……意識とは意識された存在以外のなにもでもない。……（四）……」

諸関係とが、ちょうどカメラの暗箱のなかでのようにさかだちしてあらわれる場合には、この現象は、網膜のうえでの対象の倒立が人間の直接に形而下的過程からうまれるのとちょうどおなじように、じつは人間の歴史的な生活過程からうまれるのである。

……かくして道徳、宗教、形而上学その他のイデオロギー、ならびにこれらに照応するいろいろな意識形態は、もはや独立した性質をもつという外観を保持しない。それらのものはなんらの歴史をもたないし、それらのものはなんらの発展をもつことなく、むしろ、物質的生産と物質的交通とを發展させつつある人間が、かれらのこうした現実といっしょに、かれらの思维や思维の諸生産物をかえていくのである。意識が生活を規定するのではなくて、かえって生活が意識を規定するのである。^(四)（傍点筆者）

唯物論的な歴史把握の方法が、ここに要約されている。意識面での諸問題は、なによりも生活過程から説明されな

ければならないという命題は、ここではじめて成立したとみることができ。さらに注意を要するのは、マルクスが、右引用文のなかで、意識一般と精神的生産、精神的生産の諸形態、を区別している点である。意識一般とは、「観念 (Idee)」、表象 (Vorstellung)、「意識 (Bewusstsein)」といった抽象概念に代表される次元であり、精神的生産とは「政治、法律、道徳、宗教、形而上学等々のことばのうちにみられる精神的生産」であって、政治、法律、道徳、宗教、形而上学など精神的生産の諸形態と区別され、それらの本質作用をしめすものとして把握されている。これは、イデオロギーの構造を考察していくうえで重要な視点を与えるものといえることができる。

しかし、このことは、イデオロギー概念が、社会現象の総体のなかで、最終的に整理されて位置づけられたことを意味したのではなかった。かれが「あらゆるイデオロギー」というとき、そこにはさまざまな意識現象や思维現象が想定されていたとおもわれる。だがかれはまた「道徳、宗教、形而上学その他のイデオロギーならびにこれらに照応するいろいろな意識形態」というふう^(五)に、イデオロギーを意識一般から区別して或程度体系化されたものと考えているかとおもえば、他方では意識諸形態をそれから区別するかのよう^(六)にしているし、さらにこのあとでは「イデオロギー、宗教、道徳などを……」^(五)とのべて、イデオロギーを宗教、道徳と区別されるべきものかのような思考をも示しているのである。

このような傾向は、ひきつづき『共産党宣言』(一八四八年)においてもみることができ。

上部構造については、ここでは *Uberbau* という用語をもって次のようにのべている。すなわち、「現代社会の最下層であるプロレタリアートは、公的社会をつくっている全上部構造を爆破しなければ、おきあがることも、たちあがることもできない」と^(六)。これだけの表現では、もとより上部構造概念が追求されているとはいいい難い。ただ内容的に、権力機関を中心とした、社会制度、社会機構を指していることが推察されるにすぎない。また、イデオロギーに

関連する問題については、次のように敘述している。

「人間の生活関係、その社会関係、その社会的存在とともに、人間の表象、直観 (Anschauung) / 概念 (Begriff) / 一言でいえば人間の意識もまた変化することを理解するのに、ふかい洞察が必要であろうか？

..... (中略)

けれども、という人があろう、一宗教的、道徳的、哲学的、政治的、法律的などの諸理念 (Idee) は、もちろん、歴史的発展がすすむにつれて変化した。だが、宗教、道徳、哲学、政治、法律は、この変化にもかかわらずつねに存続してきた、と。

..... (中略)

しかし階級対立がどんな形をとったにしても、社会の一部が他の部分を搾取するということは、すべての時代に共通な事実である。だからすべての時代の社会意識が多様多様であるにもかかわらず、ある一定の共通の形態のなかでうごいているのは当然である。この意識形態は階級対立の完全な消滅とともに、はじめて完全に解消する。」 (傍点筆者)

この文章も、生活過程の意識にたいする規定性をいうために書かれているのであるが、意識の変化を理念の変化と同一視している点は、意識の高次概念としてのイデオロギーを位置づけるという問題意識が欠如していたことを示している。ただ、社会意識 (gesellschaftliche Bewusstsein) と意識形態 (Bewusstseins form) とを明確に区別している点は注目に価するが、しかし、この両者の概念は「宗教的、道徳的、哲学的、政治的、法律的などの諸理念」と「宗教、道徳、哲学、政治、法律」をうけていると解するほかはなく、そうであれば、この区分の意義も、「ドイツ・イデオロギー」の域を出るものではない。問題が、この両者の関係をどう位置づけるかということ、およびそれらがイデオロギー概念のいかなる部分を構成するのかというところで展開されていないからである。

ところでよく引用される『ブリュメール十八日』(一八五二年)における次の一文——「さまざまな財産形式のうえに、社会的生存条件のうえに、独特のかたちをとったさまざまな感覚、幻想、思惟方法、人生観の全上部構造がそ

びえたっている」——もまた、科学的な上部構造概念の追求をおこなっているものではない。ここでは、感覺 (Empfindung) 、幻想 (Illusion) 、思维方法 (Denkweis) 、人生観 (Lebensanschauung) といった異質の諸概念がつきまぜにされて上部構造 (Uberbau) とされている。比喩的な表現であるとはいえ、今日的な視点からいえば誤謬を含んだいい方である。これは要するに、この段階までは、上部構造概念を、あらためてとらえかえすことによって、明確にする、という姿勢が十分でなかったからであろうと考える。

マルクスの段階における、上部構造とイデオロギー概念についての厳密な定式化は、『「経済学批判」序言』(一八五七年)においてはじめてあらわれる。念のため引用してみよう。

「人間は、かれらの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、すなわちかれらの物質的、生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係を受容する。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を、すなわち、そのうえに一つの法律の、かつ政治的な上部構造がそびえたち、そしてそれに一定の社会的意識諸形態が照応する現実的な土台を形成する。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識がかれらの存在を規定するのではなくて、逆に、かれらの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。」(傍点筆者)^九

いうまでもなくこれは、はじめて土台、上部構造にたいする正面からの把握という姿勢で書かれたものである。それだけにここには、いくつかの重要な指摘をみることができる。第一に、生産力と生産関係とを区別し、生産諸関係の総体を経済的構造すなわち土台と規定することによって、生産と土台との概念を明確に区別している。これは、「ドイツ・イデオロギー」にいう第一次的な歴史的行為を、実体的な経済概念から区別するものとして、土台・上部構造論を構成するうえでの貴重な示唆を与えるものといわなければならない。第二に、「一つの法律の、かつ政治的な上部構造 (ein juristischer und politischer Uberbau)」というとらえ方をすることによって、法律的にしてかつ政治的

な構造、すなわち権力構造を独自概念として抽出している。これも、これまでみられなかった重要な指摘である。さらに第三に、上部構造を「社会的意識形態 (gesellschaftliche Bewusstseinsform)」と區別し、それぞれの土台にたいする関係を、前者を「そびえたつ (sich erhebt)」ものとし、後者を「照応する (entsprechen)」ものとしている。これは、定式化の重みをもった文章であるところからみて、単なる表現上のアヤとはおもわれない。これは、土台のそれらにたいする規定性、相違をいっているのである。ただ、このすぐあとで「自然科学の正確さで確認できる経済的生産条件における物質的変革と、人間がこの衝突を意識し、かつ、たたかいぬく法律的、政治的、宗教的、芸術的あるいは哲学的な、つまりイデオロギー的な諸形態とを、つねに區別しなければならぬ」という敘述がみえるが、このイデオロギーの形態が、法律的・政治的上部構造と社会的意識諸形態の双方を指すのか、後者のみを指すのかは明確ではない。つまり、イデオロギー概念によって両者を同一次元で包括しようと考えていたか、それともイデオロギー概念を上部構造概念と區別するというとらえ方をしていたのかははっきりしないのである。したがってまた「上部構造」と「意識形態」との相互関係についての追求もなされてはいない。だが、それにもかかわらず、この定式における把握には、「上部構造」にしても「意識形態」にしても、これまでみてきたとらえ方とはことなつた厳密な配慮がみられるのであり、われわれの研究の出発点となしうべきものといわなくてはならない。

(一) たとえば、ゲ・イエ・グレーゼルマン、蔵原惟人、上田俊一訳『上部構造論』一九五六年、青木書店 一一頁。

(二) 筆者の知るかぎりでは、「上部構造」という用語は、『ドイツ・イデオロギー』にはじめてあらわれてくる。また、「イデオロギー」という用語は、一八世紀のフランスにおける「観念学Ⅱイデオロジ (Ideologie)」からきているといわれるが、社会的存在性との関連を究明するなかで「イデオロギー」概念を追求するという方法は、『神聖家族』を前提としながらも、『ドイツ、イデオロギー』においてはじめて成立したとみることができるといえる。

- (三) マルクスとエンゲルスは、のちにはずっと *Überbau* という言葉を統一して用いているにかかわらず、このことは *Supers-
struktur* という言葉を使用している。これは「上部構造」概念が、厳密な概念規定のもとでとらえられていなかったことを暗示し
てゐる。Karl Marx und Friedrich Engels, *Die deutsche Ideologie, Marx/Engels Werke*, Bd. 3, Berlin 1958, S. 36.
- (四) derselbe, a. a. O., SS. 26-27 邦訳、マルクス・エンゲルス選集 大月書店版 第一卷 二二一―二三頁。
- (五) derselbe, a. a. O., S. 60. 同右、七〇頁参照。
- (六) K. Marx und F. Engels, *Manifest der Kommunistischen Partei, Marx/Engels Ausgewählte Schriften in
zwei Bänden*, Bd. I. S. 34. 前掲 マル・エン選集 第二卷 五〇二頁。邦訳は *Überbau* を「上層部」と訳しているが
「上部構造」とすべきである。
- (七) derselbe, a. a. O., SS. 41-42. 同右、五一―五二頁。
- (八) K. Marx, *Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*, derselbe, a. a. O., S. 250. マル・エン選集 第五卷
三二五頁。
- (九) K. Marx, "Zur Kritik der politischen Ökonomie" Vorwort, derselbe, a. a. O., SS. 337-338. マル・エン選集
補卷 3 三頁。

二

しかしながら、この『「経済学批判」序言』における定式の意味は、必ずしも正しく発展させられなかった。いや
むしろ、見落されてきたといっても過言ではない。

エンゲルスは、一八五九年、『フォルク』紙上に同書にたいする書評をよせたが、この書評の『序言』に関する部
分で、かれがもっぱら強調したのは、「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約す

る」という命題や、「人間の意識がかれらの存在を規定するのではなくて、人間の社会的存在がかれらの意識を規定する」という命題の意義についてであった。そこには、さきあげたような、マルクスが定式化をおこなうにあたって慎重に配慮した諸問題についての適格な評価はなく、それらを正しく受けとめるうえで、欠けるところがあったかとおもわれる。^(二)

この疑問は、『反デューリング論』（一八七七、八年）にもひきつづいて指摘することができる。ここでも、一貫して強調されていることは、正、当、に、も、歴史の唯物論的把握の意義である。だがそれゆえにか、ここでは、社会諸現象を包括し、それらが究極において、経済に規定されるものであることをいうにとどまっている。たとえばかれはいう。

「生産ならびにすべての経済的關係は、この歴史観（観念論的な筆者注）では、ただ『文化史』の從属的要素として、付随的にあらわれたにすぎなかった。これらの新事実のために、これまでの歴史全部をあたらしく研究しなおすことが、どうしても必要になった。そしてその結果、これまでのすべての歴史は、 \wedge 原始状態はべつとして、 \vee 階級斗争の歴史であったこと、これら相互に斗争する社会諸階級は、つねに、その時代の生産諸關係と交換諸關係との、一口でいえば、経済的諸關係の所産であることが、あきらかになった。したがってまた、社会のそのときどきの経済的構造こそ、けっきょくにおいて、あらゆる歴史的時代の法律制度や政治制度ならびに宗教的・哲学的その他の考え方などの全上部構造を説明すべき実在的基礎であることがあきらかになった。^(三)」

この引用のとくに最後の部分に注意されたい。ふたたび「序言」以前の段階にかえられていることに気がつくであろう。かれが「制度（Einrichtung）」と「考え方（Vorstellungsart）」とをひとからげにして「上部構造（Uberbau）」^(四)というとき、かれの脳裏には、マルクスのいう「上部構造（Uberbau）」と「意識形態（Bewusstseinsform）」との概念上の区別はなかったとみななければならない。かれは、社会諸現象の決定要因を、「けっきょくにおいて経済だ」

というあまり、すべてを包括して、形容詞的な表現で「上部構造」といつているのである。このことは、かれが、さらにこのあとの方で、「しかし科学の第三群、すなわち人間の生活条件、社会的諸関係、法律と国家との諸形態、ならびにそれらの観念的上部構造 (idealen Uberbau) である哲学、宗教、芸術等々を……」^(三)といういい方をしていくことからあきらかである。もちろん、これらの文章は、上部構造をあきらかにするために書かれているのではない。だがそのような視角は、『反デュリング論』のどこにもないのである。一般的にいつて、マルクス没後のエンゲルスには、『序言』における定式の意味をつかみ発展させるという問題意識に充分でないところがあつたと考えざるをえない。

かような傾向は、晩年、かれがイデオロギーを問題にしたときに、それをもっぱら土台からの距離においてみるという曖昧なとらえ方を生みだすにいたつた。すなわちかれが、「イデオロギー的な権力Ⅱ国家」、それが生みだす「それ以上のイデオロギーⅡ職業的政治家や国法の理論家や私法の法律家たち (の思想?)」、「さらにたかい、すなわちいっそう物質的・経済的基礎から遠ざかっているいろいろのイデオロギーⅡ哲学や宗教」というふうに、上部構造の全体をイデオロギーとしてとらえつつ、それらを経済的土台による規定の直接性、間接性によって階級的に位置づけたことがそれである。^(四)このようなとらえ方は、一面において、これら諸イデオロギーの土台にたいする機能の側面を表現していながら、反面において、諸イデオロギーの各種形態の独自性、その多元性を同一次元に解消するという欠陥を含んでいた。しかるに後年、エンゲルスのこの把握が教条化され、イデオロギーをみるのに、それが土台に近いか遠いかといった角度からの議論のみがひろがったのであつた。

かかる現象論的、ないしは機能論的な把握は、さらに上部構造と土台との相互作用論となつてあらわれる。『シュミット宛の手紙』(一八九〇年)における、経済的運動と政治的力との「二つの不等な力の相互作用 (Wechselwir-

「*Wirkung zweier ungleicher Kräfte*」論^(五) 『プロッホ宛の手紙』(一八九〇年)における、上部構造の「すべての要素の相互作用 (*eine Wechselwirkung aller dieser Momente*)」という指摘^(六)がそれである。おそらくこれは、『ドイツ、イデオロギー』における「かくして、そこでは当然、事態がその全体性において(そしてそれゆえにこれら諸側面の相互作用も) 敘述されうる」^(七)との一文の延長であろうと推察されるが、マルクスのそれが全体性の把握に力点がおかれているのにたいし、エンゲルスは相互作用を強調している。これは、単純な経済決定論にたいする批判、という積極面をもっていたとはいえ、土台と上部構造との間の、そしてまた上部構造の諸要素間の諸関係を、ともに相互作用という形容詞的表現をもって同一平面上でとらえ、社会現象を構成する諸要素の質的な概念上の相違をあきらかにするかわりに、それらを量的な力関係でみるという誤まりをふくむものであった。

しかしながら、エンゲルスの把握を、右のような否定的側面でのみ考察することは、一面的とのそしりをまぬかれがたいであろう。かれが、『序言』における定式を、自覚的に発展させようとしたとは認められないが、それにもかかわらずかれが、現象論的な把握をとおして、上部構造的諸現象の独自性を理論化する展望をひらいていることに注意しなければなるまい。

すなわちエンゲルスは、さきのようにイデオロギーを問題にしたときに、同時に次のように指摘しているのである。

「……しかるにイデオロギーなるものは、いずれもいったんそれがあらわれてくると、ただちに所与の表象材料とむすびついてみずから発展し、さらにこの表象材料を形成発達させるものである。そうでなければ、それはなんらのイデオロギーでもないであろう。いいかえれば、思想をそれだけで独立に発展し、自分自身の法則にのみしたがう、自立的な実在形態としてとりあつかうこと(としてのイデオロギー)ではないことにならう。ところで、このような思想過程は人間の頭脳のなかでおこなわれるのであるが

この思想過程の進行がけっきょくのところこの人間の物質的生活諸条件によって規定されているものであるというものはこの当の人間には必然的に意識されないでしまう。というのは、もしそうでなかったならば、およそイデオロギーなるものがまったく存在しないことになるであろうからである。」(傍点筆者)

かれはここでイデオロギーの独自性をはっきりさせ、それ自身の法則をもつものとしてとりあつかうことにイデオロギー分析の方法があることを示唆している。ただ、最後の部分を検討すればあきらかなように、かれのいうイデオロギーが、即自的なイデオロギーであり、かくいう自分自身のイデオロギーをイデオロギーとして対自的にとらえる姿勢に欠けているために、誤謬をふくんだ表現となっているのである。このかれの示唆は、『プロツホ宛の手紙』における、上部構造の種々な要素が歴史的斗争に作用しその形態を決定する、という指摘や、社会現象における力の平行四辺形 (Kräfteparallelogramm) の無数のグループの存在とそこから生まれる合成力への個人意志の寄与、という指摘とな^(九)ってあらわれ、さらに『シュミット宛の手紙』における次の敘述となっているのである。

「問題は、分業の見地からするともっとも理解がしやすい。社会はその不可欠の一定の共通の職務をつくりだす。この職務をはたすように指定された人々は、社会の内部における分業の一つの新部門を形成する。かれらは、それとともにかれらの委託者にたいしても特殊の利益をもつようになる。かれらはかれら(の委託者)にたいして独立化する。ここに国家が成立するのである。そして、商品取引においても、またのちには貨幣取引においても同様で、あたらしい独立の力は、全体としては生産の運動にしたがわなければならないが、この力に内在している、すなわちいったんこの力に移讓されて徐々にさらに発展した相対的独自性によって、さらに生産の条件および進行に反作用する。」^(一〇)

ここにいう、分業は、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』のなかで述べている「物質的労働と精神的労働との分化」とおなじ視点から考察することができる。分業の新部門を形成する特定人間集団が、かれらの委託者にたいして

も特殊な利益をもつにいたるといふことは、上部構造的諸現象の独自性を追求するうえでの理論的素材を提供するものといふことができよう。

エンゲルスのこうした側面は、上部構造やイデオロギーを明確にしていくうえでの出発点となりうるし、またかかる経済外的諸現象の特殊な役割にたいする率直な認識をふまえることなしには、社会現象の実証的な分析も不可能となるであろう。

(一) Friedrich Engels, Karl Marx "Zur Kritik der politischen Ökonomie", derselbe, a. a. O., SS. 342-343 ff. マル・エン選集 補巻3 二二九—二三二頁参照。

「序言」のもつ第一義的意義がこの点にあることはあきらかである。その意味においてエンゲルスのこの評価は正当である。だが、かれがもう一步すすんで、上部構造論の精密化という問題意識をもっていたならば、この点についての、他の諸著作と区別されるべき意義がつかまれていたであろう。それをエンゲルスの責に帰するといふのではない。そうではなくて、かかる問題意識をもたねばならない段階にたちいたっている現代のマルクス主義者が、この点をぬきにしてエンゲルスの無謬性を信じ、それを現在にひきうつすことの間違いを指摘しているのである。

(二) F. Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, Berlin, 1953, S. 30. マル・エン選集 第十四卷 九九頁。

(三) derselbe, a. a. O., SS. 106—107. 同右 一九五頁。
　　いうまでもないことであるが、『反デュリング論』の学説史的意義は別のところ—「真理」の問題の追求—にある。ここでは、上部構造概念の精密化がおこなわれていないといっているにすぎない。

(四) F. Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen deutschen Philosophie, Marx/Engels, Ausgewählte Schriften, Bd. II., SS. 369—370. マル・エン選集 第十五卷 四九七—四九八頁。

- (五) Engels an Schmidt. 27. Oktober 1890, derselbe, a. a. O., S. 463. 同右 五一七頁。
- (六) Engels an Bloch. 21/22. September 1890, derselbe, a. a. O., SS. 458—459. 同右 五二八頁。
- (七) K. Marx und F. Engels, Deutsche Ideologie, Marx/Engels Werke, Bd. 3. S. 38. マル・エン選集 第一卷 三九頁。
- (八) F. Engels, Feuerbach, a. a. O., S. 371. 前掲書 四九九頁。
- (九) Engels an Bloch, a. a. O., SS. 459—460 ff. 同右 五二八—五二九頁参照。
- (一〇) Engels an Schmidt, a. a. O., S. 463. 同右 五一七頁。

あ と が き

以上みてきたように、マルクス、エンゲルスのとらえ方にはそれぞれ発展があるし、またとくにエンゲルスにおいては、是正さるべき側面と発展させられるべき側面とが同時的にあらわれている。これらのすべてをいっしょくたにして肯定的にあつかうことが、間違ったやり方であることはいうまでもない。われわれの出発点とすることのできるのは、さきにあげた『「経済学批判」序言』の定式が提起した三つの問題と、エンゲルスが提起した上部構造とイデオロギーの独自性を経済からのみでなくそれ自身の法則をもつものとして追求するという問題とである。

かかるとらえ方は、これ以後も必ずしもおこなわれてこなかった。この点については別稿『マルクス「継承者」における「上部構造」と「イデオロギー」について』（九大教養部『社会科学論集』第二集）を参照されたい。